大阪商業大学学術情報リポジトリ

日本の開業思想 ―本多利明を中心に―

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2015-03-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 邦泰, MORIOKA, Kuniyasu メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/32

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

日本の開業思想

――本多利明を中心に――

森　岡　邦　泰

1．はじめに
2．四大急務、第一、焔硝
3．四大急務、第三、船舶
4．四大急務、第四、属島の開業

1．はじめに

西洋人の植民活動は、江戸時代も知られ、西川如見（1648－1724、天文・地理学者）や新井白石（1657－1725）などが記しているが、そこではまだ「植民」という語は用いられていなかった[1]（ただし白石は「国を開く」という表現を用いている）。

「今日使はれてゐる植民という語は、元来わが国にあつたものもなく、また支那から傳搬されたものでもないことが、まづ新渡戸稲造博士（明治四十四年　法學協會雑誌　二九巻二號）によつて指示された」[2]という。上記の論文において新渡戸は「今日に於ては植民なる文字は、完全なる熟語として日常使用せられ」（矢内原忠雄、373ページ）と述べているように、完全に日本語の中に溶け込んでいた。その後の研究により、この言葉は蘭学者の志筑忠雄（1760－1806）がケンペル Engelbert Kämpfer （1651－1716）の『日本誌』の付録論文を『鎖国論』（1801年）と題して訳出した際、オランダ語の volkplanting の訳語として作ったもので、「人ヲ植ルコト彼等ガ國ノ習也人ヲ其地ニ渡シテ住シムルヲイフ也」と附註していることが発見された[3]。

「植民」という用語が翻訳語であったこということは、それに対応する言葉が我が国にはなかったことを示唆している。そもそも一般に翻訳する際、自国の言葉に対応する言葉があ

1）以下の叙述は、黒田謙一、第１章によっている。
2）黒田謙一、17ページ。
3）同上。なお『日本国語大辞典』（小学館）の「植民」の項によれば、この言葉が普及したのは、『慶応再販英和対訳辞書』（1867）に colony の訳語としてこの語が採用され、その後の英和辞典に継承されていったためという。
　ケンペルが日本で紹介され、一般の知識人が知るようになったのは、志筑忠雄の翻訳『鎖国論』（1801、享和元）からだとされているが（クライナー、ヨゼフ、198ページ）、本多利明の「西域物語」が書かれたのは1798年だから（塚谷晃弘・蔵並省自『本多利明　海保青陵』日本思想大系44、岩波書店、1970年、解説、449ページ。以下『大系』と略記）、それに先立っている。おそらく翻訳されるよりも前に蘭訳書で知っていたと思われる。

ればそれを使えばよいわけで、対応する言葉がない場合に限って、翻訳語を作る必要性が生じよう。そうでなければそのまま音を移すいわばカタカナ書きをするほかない。古くは、ギリシャ語の φιλοσοφίαなる概念をキケロがラテン語に訳す際、そのまま音を移して philosophia と表記したが（いわばカタカナ書きと同じ）、そのことを指してディオゲネス・ラエルティオスが『哲学者列伝』で「哲学はギリシア人の間から起ったのであり、哲学という名前そのものもギリシア語以外の他の国の言葉で呼ばれることを拒否しているのである」と述べたのであった[4)]。しかし音を移すだけでは意味のある訳語とはいえないだろう。

日本では幕末から明治にかけて、西洋から様々な学問が入ってくる中で、翻訳のための種々の新造語を作って、日本語の中で理解し考察できるようにしてきた。上述の philosophia も「哲学」と訳されたし（おそらく歴史上初めて他国語で呼ばれた）、今日、日常的に使っている「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」も新造語であった[5)]。自然科学の用語も漢字の造語力を駆使して翻訳され（数学で言えば、たとえば matrix を「行列」と訳したり、 determinant を「行列式」と訳したりしている[6)]。物理でも化学でも同様）、自然科学の教科書や論文を日本語で書くことを可能にした（今日でも多くのアジア・アフリカ諸国ではそうはいかない）。「植民」なる言葉も、そういう流れの先駆であっただろう[7)]。

ここで取り上げるのは、江戸時代の算術家にして経世家であった本多利明（1743－1821）である。本多は越後村上（あるいは新潟県福島潟から村上までの線上のどこか）からの出身とみられ、18歳の時に江戸へ出て、関孝和の高弟今井兼庭に算学を学び、関孝和の100年忌を主催して碑を立てている[8)]。24歳の時（1776年）、江戸で算学・天文の私塾を開いた在野の学者で、身分は家持町人である。晩年（1809年）には加賀藩から二十人扶持を受けている。諸国の藩士・儒者に門人がいたようで、『行状記』によれば「数百輩」である。しかし今日、算術家というよりその経世論で名前が知られている。

江戸時代、ロシアの南進を契機に、対外的危機意識の高まりが起こってくる。北方問題である[9)]。1771年（明和８）、ハンガリー人ペニョフスキーが、ロシアが千島を南下し、松前及びその周辺を攻撃するという警告を、長崎のオランダ商館にもたらし、これが幕府に伝えられた。ロシアの動静は松前藩や幕府関係者以外にも知られるところとなり、仙台藩医・工藤平助は松前藩関係者、長崎オランダ通詞、蘭学者などから情報を得て『赤蝦夷風説考』（1783年）を著し、ロシア対策を提言した。これを見た老中・田沼意次は1784年（天明４）に勘定奉行・松本秀持に蝦夷地調査を命じた。

さらに1792年ロシア使節ラックスマンが根室に来航して国交を求めてきた。林子平はそれ

4）竹市明弘・常俊宗三郎編、28ページ。ディオゲネス・ラエルティオス、15ページ。
5）柳父章、「まえがき」ii。
6）朝永振一郎の『量子力学』（みすず書房、現行第２版は1952年）が、マトリックスとカタカナ書きにして、行列の演算を足し算から、一から解説しているのは，興味深い。このことは、朝永の学生時代には物理学徒の間ではまだ行列が一般的に知られていなかったことを示唆している。
7）では漢語ではそれに対応する言葉がなかったのか。これについては新渡戸稲造が前記の論文で考察していて、漢書の董仲舒伝並びに管仲の書中に「民殖」なる語が見いだされるが、これは民を殖やすという意味に過ぎず、植民なる成語はついに存在しない。あるいは移民、遷徒の文字があるが、これは単に民を移すという義であって、今日の植民の意味よりは遙かに狭い。結局「支那に於ては植民なる意義を表はす文字は不完全」と結論づけている（矢内原忠雄、374ページ）。
8）『大系』「解説」448ページ。
9）以下の叙述は、菊池勇夫、226ページ以下による。

に先立ち『海国兵談』（1791年）を著し、ロシアに備える国防を説いたが、当時老中にあった松平定信は外交・防備は幕府の専管で、私人の容喙することではないということで処罰した。

さてそうした時代背景のもとで、本多利明の著作が書かれることになる。本多も「日本の周海に、繁々異国船漂着の沙汰あり」[10] といっている。またペニョフスキーにも言及している[11]。

ところで植民という用語について付言しておけば、利明は、「西域物語」の中で、ケンペルに言及している。「日本へ渡来の加比丹にケンプルと云し有。……本国へ帰帆の後、書を著せり」[12] といって、「書」すなわち『日本誌』について述べている。ケンペルの後、すなわち「其後も」「アーレントイルシムペートと云カピタン東都へも二次参り、殊に日本の事に委く、書を著はしアモニタチユンと題号せり」[13] といっている。この「アモニタチユン」 Amoenitatum なる書物は、利明は「アーレントイルシムペート」すなわち Arend Willem Feith の著作だとしているが、実はケンペルの『廻国奇観』 のことであることが知られている[14]。これはケンペルが生前刊行した唯一の本である。死後、残された原稿をもとに『日本誌』が出版され、ヨーロッパの日本理解に多大な影響を与えた。ここで利明が、『西域物語』の中で「余、其書を閲するに、第一、帝城の事を記せり。諸御観式、能狂言の時、参上の諸侯列席の〔体〕、……」と書いていることについて、小堀桂一郎氏は、ここで書かれていることは、『日本誌』のほうで、「第一、帝城の事」というのは、おそらく『日本誌』巻頭のシャム王城の挿図を見て言っていると察せられるが、それを Amoenitatum 『廻国奇観』の如く思っていたのはどうしたことであろうか、と疑問を呈している[15]。

2．四大急務、第一、焔硝

経世家としての本多の課題は、いかにして国を富ませるかということであった。「国家豊饒策」（＝「経世秘策」）という題名そのものがそれを物語っている。その方策が、四大急務であった。それは、焔硝、諸金、船舶、属島開業の 4 つである。「四大急務を以、国家の最大一として治むるに於ては、増殖に行き閊なき故に、弥盛に増殖する故、当時の如く大造に良田畠を亡処とすることなく、却て良田畠を開副て、国家豊饒となる」[16] というの

10）『大系』「経世秘策　補遺」110ページ。
11）『大系』「西域物語　中」133ページ。
12）『大系』「西域物語　中」116ページ。
13）『大系』「西域物語　中」116ページ。
14）原題は Amoenitatum exoticarum politico-physico-medicarum fasciculi V: quibus continentur variæ relationes, observationes & descriptiones rerum Persicarum & ulterioris Asiae, multa attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectæ ab auctore Engelberto Kæmpfero, D.「政治学的・自然学的・医学的主題に関する異国の魅力ある事柄五巻：著者エンゲルベルト・ケンペル博士が東方世界の旅行において注意深く収集したペルシアとアジア極地に関する様々な報告，観察，描写を含む」（五之治昌比呂、261ページの訳文による）。
15）小堀桂一郎、127－128ページ。阿部氏は『廻国奇観』を実見したかどうか疑わしいとしている（阿部真琴「本多利明の伝記的研究㈠」82ページ）。
16）『大系』「経世秘策　巻上」13ページ。

である。あるいは「是を修行すれは国家豊饒となる。是を修行せされは国家衰微となる。是れ即治道自然の天理にして、国土守護の天職なり。依て是を四大急務と云ふ」[17]。逆にこの四大急務を行わなければ、「亡処、手余地（てあまりち）」が増え、ついには「災害」に至ること、「古今の定例（ていれい）」だという[18]。

これが本多流の、国を富ます方策、国富論であった。

まず焔硝について、以前拙論で少し触れたこともあるが[19]、従来の研究であまり指摘されなかった点を指摘しよう。

焔硝とは硝石、すなわち硝酸カリウムで、火薬の原料であり、漢方の医学でも用いられたが、本多利明はこうした利用だけを考えているのではない。利明によれば、「焔硝は日輪の湿気地中に入て焔硝となり、亦海中に入て潮汐の滷となり、……海中に凝塊するを硫黄と云」[20]。「焔硝も硫黄も元来火陽変象なりと知るべし」[21]。火陽、すなわち太陽のエネルギーが土中に入ったものが焔硝で、海に入ったものが塩となり、それが凝固したものが硫黄となるという。これらは太陽エネルギーが形態を変えたものである。今日から見れば、硝酸基も塩（塩化ナトリウム）も硫黄も、全然別の元素から構成されているのだが、利明はともに太陽エネルギーが変化したものだと見ていた[22]。

硫黄が集まった硫黄山に「日輪の陽火」が移ると、火山となる。浅間山や大島がそうだという。そして火山から金銀銅鉛鉄なども生じる[23]。

これらはみな、「太陽の一物」より出たもので、太陽の「光輝温熱」が焔硝となり、潮汐となり，硫黄となり、それが燃焼すると、炎火となって再び太陽へ戻る。かくして太陽の「光輝温熱」という「無体」のものが、焔硝という「有体」となって、それが燃えるとまた「無体」となって、「廻転」するという[24]。つまり太陽エネルギーが焔硝のような物体（「有体」）となって、それが燃焼すれば、再び形のない「無体」のエネルギー形態となるのである。このようにエネルギーと物質が次々と相互に形態を変えていくと見ている。その意味で、エネルギーと物質が同じものだと見ていることになる。

本多によれば、もし土中から焔硝をとらないでおくと、「天雷（てんらい）」が落ちて「火災」となり、乾燥しているときには「天火」を招き、火災となり、そこに人の過失があれば、大火となる。猛火は人力で鎮めることができないものだから大都会といえども焼失する。これはみな焔硝を採掘しない過失だという[25]。

つまり焔硝は単に火薬の原料として必要なだけでなく、採掘しないでおくと、太陽エネルギーが異常に蓄積されて自然発火し火災が生じると考えているようである。災害を避けるためにも焔硝の採掘は重要で、四大急務に入っているのだろう。

17）『本多利明集』「自然治道之弁」264ページ。
18）『大系』「経世秘策　巻上」13ページ。
19）森岡邦泰、37ページ。
20）川越重昌、4ページ。
21）川越重昌、4ページ。
22）『天工開物』の硫黄の説明でも、こういうものはない。『天工開物』では、硫黄は純陽のもので、硝石は純陰のもので、両者が互いにつきあって火薬の爆発力を出すという（宋応星、224ページ）。
23）川越重昌、5－6ページ。
24）川越重昌、6ページ。
25）『大系』「経世秘策　巻上」14ページ。

そもそも自然界からとれる焔硝が、どこから来るのか、どのように生じるのか、長らく謎であった。硝化細菌によるアンモニアの酸化反応で硝酸塩が生じることが知られるようになったのは、1880年代のヴィノグラドフスキーによるので、ずっと後代のことである[26]。

そこでさまざまな仮説が出されたが、我が国では宋応星の『天工開物』の影響が大きかったようである[27]。『天工開物』によれば、「消石（硝石）の本質は、塩と同じものからできる。大地の下には潮気がむれて地面に現われるが、水に近くて土の薄いばあいは塩となり、山に近くて土の厚いばあいは消石となる」[28]。つまり地下の塩類が毛管現象で吸い上げられて、地表に塩類が析出する。そこに水があれば硝石は水に溶け塩が残る。水分が少ない場所で硝石がとれるというわけである[29]。佐藤信淵も天工開物に基づいた理解をしていたようである[30]。本多利明も硝石を塩類と本質が同じものだと考えている点では、『天工開物』の枠組みの中にあると言えよう。この場合、地中には既に大量の硝石の源があると考えている（地中潮気説）[31]。それ以外に、潮の干満と結びつけて、潮の気が地上で析出し凝固したのが、硝石であるという考え（潮気干満説）。硝酸は空気中に天然に存在するという考え（大気説）があったようである[32]。

板垣英治氏は、潮気干満説の事例として本多利明の『山塩硝』（寛政５年、1798）をあげ、また大気説の事例としてやはり本多利明の『硝石製造大略』（寛政５年、1798）をあげている。また同じく本多の『硝石製造大略』では、フランスの事例を引いて西洋における硝石製造法である「硝石丘法」を本多が紹介しているのを指摘している[33]。同じ年に書かれた著作でまったく違っていることを本多が言っているかのようであるが、潮気干満説は、『焔硝基源論』で説いた太陽エネルギー説の枠組みの中に収まるだろう。大気説は、「石灰様の土に」大気中の酸気が入ると硝石となると言っていて[34]、微妙に違っているように見えるが、硝石が生み出すエネルギーの起原の話はない。もしそれを入れるとすると、『焔硝基源論』の議論になるに違いない。『硝石製造大略』は硝石の取り方の非常に技術的な著作で、『焔硝基源論』のような原理論的、自然哲学的な著作ではない。また『山塩硝』は、「水邊に遠りしに、日向受宜く、切立て嶮岨なる山を吉とす」[35] と始まるように、山で焔硝を取る場所、取り方を書いた技術書で、やはり原理論ではない。

上記のように本多利明は、硝石が火薬として用いられたときに発するエネルギーを太陽に由来すると見ていたが、『天工開物』の「消石（硝石）」の項目にもそういう記述はない。近代産業文明が石炭、石油といった太陽エネルギーを蓄えた化石燃料によって初めて可能になったことを考えるとき、本多利明の先見性には驚嘆させられるのである。

26）板垣英治、31ページ。
27）板垣英治、29ページ。
28）宋応星、303ページ。
29）板垣英治、29－30ページ。
30）板垣英治、30ページ。
31）板垣英治、30ページ
32）板垣英治、30ページ。
33）板垣英治、35ページ。より詳しくは本多利明『硝石製造大略』。
34）本多利明『硝石製造大略』、及び板垣英治、30ページ。
35）『山塩硝』冒頭。詳細な阿部真琴の著作目録でも、この『山塩硝』と『硝石製造大略』はなぜか入っていない。なお句読点を補った。

焔硝を、本多が富国策の四大急務の第一にあげたのは、それによって、国内の物資の運送が容易になるからである。火薬は河川の船舶の運行の障害となる岩石を破砕して、河道を通じることができ、諸藩が自国の産物を他国に搬送して売却することができるようになる。また険阻な峠道に発破をかけてより通行が容易になる。これまで海中の岩石に座礁して人命・物資が失われることが多かったが、火薬で破砕すれば、それも防げる。これはもっともとはいえ、そんなに重大なことかと不思議に思うかもしれないが、本多があげる例は、切実である。

例えば、奥州にある阿部熊川は、所々に大岩石あって堰となり、大滝となって、通船できない。故に国民皆困窮している[36]。それを火薬で破壊しろというのである。

また新潟から大阪まで船で米を運ぶと40%が荷投げや破船で失われ、陸路は山道が多く、運送費用が高くつく。そのため「国産種々」あっても、生産地で腐敗することが多い。そこで焔硝で岩石を砕き、河道を通じるべきだという[37]。生産地で生産物を外へ運送できないため腐敗してしまうことが、千曲川のある信州の山国では多い[38]。だから「天下国家は有無を通る以、寒飢の憂なく、万民其欲る所を得るなれば、世に通船・運送・交易程最大なる国務はなきことなり」[39]という。

むろん、火薬は「武備の要害・武国の名」にかない、戦時にはその蓄積量はこれまでの諸国の盛衰勝劣を決定してきた重要物資であった[40]。

火薬は、四大急務の第四の開業においても鍵となる。「都て開業の大業は、焔硝を不用してなし難し。故に欧羅巴州は焔硝を以、国家に最良最長の産物として国用に達し、大功を取ること夥し」[41]という。

本多は西洋を理想化し、日本の進むべき道を指し示している先例だと考えていたが、「モスコヒヤの女王エーカテリナなる者大功数ヶ条の内隣国に大湖あり大雨長く毎次に溢水大湖の周廻に溯り万民の難儀是より甚しきはなし時に女王その害を禦ん事を謀り彼大業を用ひ里程十七里の山を穿て大河もなりてより湖水の憂なきのみに非らす河道開けて通船の運送便利を得国民大に悦ひ」[42]とあるように、火薬が国土開発の要諦だと見ており、西洋はそれによって大国になったと考えていた。

36）『大系』「経世秘策　後編」71ページ。
37）『大系』「経世秘策　後編」72ページ。
38）『大系』「経世秘策　後編」73ページ。
39）『大系』「経世秘策　後編」73ページ。
40）『大系』「経世秘策　巻上」15ページ。
41）『大系』「経世秘策　巻上」16ページ。
42）『自然治道之弁』。宮田純「本多利明の経済思想・寛政７年成立「自然治道之弁」の総合的研究」29ページに引用。

3．四大急務、第三、船舶

次に第三の船舶について。富国策として、船舶をあげているのは、経世家の中で珍しいのではないだろうか。それは、大半の経世家が儒学、あるいは漢学の教養を基礎とする人たちで、本質的に文系であったのに対し、本多が自然科学畑出身者であったことが大いに関係しているだろう。それは焔硝を四大急務の第一にあげたことにも現れている。

「天下の産物を官の船舶を用（もちい）て渡海・運送・交易して、天下に有無を通じ、万民の饑寒を救ふを云なり」[43] というように官営貿易によって、物資の過不足を調整することを本多は主張する。民間ではなく官営貿易なのである。なぜなら「渡海・運送・交易は国君の天職」であり、「商民」に任すべきではないからであり、万一商民に任そうものなら「奸計貪欲（かんけいどんよく）を恣（ほしいまま）にする」から、物価が平均することなく、「相場同じからず」となって、高下あって農民の生計が成り立ちがたくなるからである。こういう現状を打開するには官営貿易を行って物価の平均化を図るべきだと主張する。運輸を商人に任せると、農民は次第に困窮し、万一「凶歳饑饉」に当たれば、ほかの人々に先立って農民が多く餓死し、田畑の亡処が生じ、生産物が減少し、国家が衰微することになる[44]。

もう一つの理由は、商業の利益を商人が独り占めにして、それによって武士が困窮しているからである。本多によると、佐竹候の羽州仙北郡のあたりは米一升、５、６文。商人は毎年江戸へ廻して、普通凡そ100文の値がつく。この割合を以て考えると、16分の15は商家の収納、１が武家へいく計算になる[45]。本多は国富の16分の15を商人が手中に収め、武士は16分の１しか入手できていないと主張する。

さらにもう一つ、商人に「運送交易」を任せられない大きな理由は、途中で江戸への廻米の４分の１を、船頭と水主（かこ）が盗み取って、役人には、難風による投荷、破船、などと偽の訴えをし、役人の方でもそれに感づいてはいても証拠立てる手段がないので、野放しになって、横領がまかり通っているからだという。また海賊に襲われることが少ないからだという。

当時の航海技術では、沿岸を離れることができず、ひとたび沿岸を目視できなくなれば、方向を見失ってしまうので、積み荷の損害は甚だしい[46]。本多によれば、わが国では，天文を暦を作るだけのものと片付けて、支那の山国の風俗のみを是とする心根だ。天文・地理・渡海が三にして一なることを知らない。また船長を賤業とするから、愚暗で一文不通の者のみが船長となる。だから地回り乗りしかしらず、磯辺の水面下に岩石があることがあり、古来より灘として知られているが、台風などにあえば、あるいは投荷し、あるいは破船して、国産を失うことその数知れない。米だけに限っても、毎年平均百万石に及ぶという[47]。

この百万石という数字の妥当性についてはわからないが、菱垣廻船でいえば、安永元年（1772）に総数160艘（ちなみに樽廻船は106艘）が確認されており[48]、柚木學氏の研究によると、天明４年（1784）から天保２年（1831）の48年間で、一年平均約20艘の難破船・荷打

43）『大系』「経世秘策　巻上」18ページ。
44）『大系』「経世秘策　巻上」18ページ。
45）『大系』「西域物語　下」153ページ。
46）『大系』「経世秘策　巻上」19ページ。
47）『大系』「西域物語　上」105ページ。
48）『国史辞典』「菱垣廻船」の項目。

濡痛船が出ているという[49]。これは約12パーセントの高い損耗率で、大きな損失である。ほかの経世家と違って本多が船舶を重視し、四大急務に入れたのは、一つにはこの損失の大きさによるものだろう。当時の船舶輸送の技術が不十分で、破船や浸水による損傷、嵐にあった場合の投げ荷によって物資の多大な損失があった。ほかの経世家と違って、机上の空論によらない、より実証的・現実的な態度を見て取ることができる。

これに対して「欧羅巴諸国は、国王あって万民を撫育するに、渡海・運送・交易を以、饑寒を救ふを国王の天職とせり。故に盗賊抔は決てなし」[50]という。西洋が官船交易をしていると本多は考えていた（むろん実際は違うが）。

船舶技術の重視は、人口原理とも関係している。

「元来無理なる仕方あり。其無理なる仕方といふは、固より日本の国内の国産は出産に際限あり。万民の増殖は限りなし。此出産に際限ある国産を用て、増殖に際限なき国民を、末遂て余さず洩さず養育して、猶有余あらしめんとするは無理ならず哉。終に国民は国産よりも多く、国産は国民よりも少く迫り至る期到来せずんば非ず。是れ無理なる証拠なり。元来際限ある国産を以、次第増殖に際限なき国民を養育せんことは迚も仕難し」[51]という。

ここで「元来無理」だと言っているように、人口法則が、生物法則としてとらえられている。この人口法則は、『西域物語』では、マルサスの人口法則にも比肩される思考実験によって裏付けられる。本多によれば、人口はひと組の夫婦から33年で19.75倍に増える。日本を19.75倍広めなければ、生産物が不足することになる[52]。仮に、享保の改革時の勘定奉行の圧政にも拘わらず、もとの百姓が１万人いるとすれば、33年のうちに、19万7500人となる。さらに33年経てば、390万625人となるという。貴賤とも増殖する勢いを含んでいるので、その勢いを扶助すれば、世話なしに増えていく[53]。このように生物法則として、平和が続くと、武士も商人も増殖する。奢侈も同様に増え、僧工遊民も同様に増殖するので、農民だけでは支えきれなくなり、食糧不足となる[54]。ところが現在は、このように増えるはずの人口は、扶養の見込みがないので、間引きされている。それによって人口の増大が押さえられているが、本来、どれほど多く子孫があっても、一人も間引きしなくても養育食糧に不足せず、成長の後は、生計を立てるのに滞りないようにするのが、政務の第一の肝要のはずである[55]。だから航海術に熟練して「官船を用いて運送交易」しなければならない[56]。「渡海・運送・交易」で、よそから必要な物資を日本に供給することによって、「衣食住共に湧き出し」、何不自由なくなるだろう[57]。こうして「飢寒」を防ぐことができ、さらに「万国の国産を抜取」ることができる[58]。そうすれば生産物は次第に多く入ってくるので、「万民

49）柚木學、171ページ。本多は新潟から大阪まで米を船で運ぶと、荷投げや破船で40％の損失が生じるというが、これがどこまで妥当かは不明（『大系』「経世秘策　後編」72ページ）。
50）『大系』「経世秘策　巻上」18ページ。
51）『大系』「経世秘策　巻上」85ページ。
52）『大系』「西域物語　下」147ページ。
53）『大系』「西域物語　下」151ページ。
54）『大系』「西域物語　下」144ページ。
55）『大系』「西域物語　下」144ページ。
56）『大系』「経世秘策　巻上」85ページ。
57）『大系』「西域物語　下」151ページ。
58）この抜き取るという表現に、本多のいわゆる国家理性による商業戦争（あるいは重商主義的と言ってもいいかもしれない）が、よく現れている。

の増殖」に差し支えなくなる。そうして増殖すれば、ついには大国となり、「大豊穣、大剛国」となって、石造りも家屋もいつの間にかできて、万民大安堵するという。だから国務の根本は、船舶にある[59]。こうして「日本周廻の属島の島産及周廻の海産を、自然と日本へ独り入来る様に仕掛」にしなければならないとする[60]。

4．四大急務、第四、属島の開業

四大急務の第四が属島の開業である。

それは第一に、人口法則と関連していて、上述のように、人口はひと組の夫婦から33年で19.75倍に増えるから、理屈上は、日本を19.75倍広めなければ、生産物が不足することになるといっていた。これを現実に可能にする手段が属島の開業である。

日本にまだ空山曠野があって新田畑を開発したとしても、人口原理によれば不足するだろう。「拾九倍七分五厘は如何あるべき」かという。だから「自国の力を以、自国の養育をせんとすれば常に不足、強てせんとすれば、何一ツ成就する事なし。他国の力を容んは、海洋を渉渡せざれば、他国へ至る事難し。海洋を渉渡するには、天文・地理・渉渡の法に暗くては、海洋を渉渡する事ならず。故に西域の風俗人情の事を呉々も述たる也」[61]という。つまり人口原理によって、日本は進出を運命づけられていることなる。しかしこれは他国でも同じはずだから、地球の表面が有限である以上、いつか衝突が起きることを含意するはずだ。それについては本多は「戦争を歴ても、土地人民を得べき本意とする処なり」[62]と、戦争も辞さずとの覚悟も表明している。また「他国を侵ても本国を増殖せんこそ国の務」[63]と国家理性に基づく領土獲得を述べているが、実際の方策は文明化作用に基づく撫育策である。

本多は、まず日本周辺の島々を日本の勢力下に置くことを主張する。蝦夷の諸島、八丈島沖の無名島、五島沖の鼓島、佐渡沖のマウソウ島（北海道の礼文島）、常陸沖の無名二島へ渡海し、日本の所産物を以て、撫育・交易したら、33年の内に19.75培の増殖も自然にかなう、という[64]。このようにして一人につきを子孫19.75人ずつ増殖しても、産業に行支なき制度を作って対処すれば、国家は豊穣となる。「国家の根本たる人民の増殖に行支へ、産業に行支へある故に、間引子」を余儀なくされるのだ[65]。

そもそも天明の飢饉をはじめとする飢饉で餓死者がおびただしく出たことが、ヨーロッパに比べ日本の遅れた点だとしている[66]。もし渡海・運送が行われていれば、日本は島国だから、三方陸続きの支那と違い、日本が残らず飢饉になっても（外国から）食料を搬送することができ、飢饉を防ぐことができたであろう。だから日本の周囲の諸島を開業しなければな

59）『大系』「経世秘策　巻上」85ページ。
60）『大系』「経世秘策　巻上」85ページ。
61）『大系』「西域物語　下」147ページ。
62）「蝦夷道知邊」『本多利明集』331ページ。
63）『大系』「西域物語　中」133ページ。小田氏によれば、ほかの重商主義者同様、帝国主義的侵略の意図だという（小田信士「本多利明の重商主義思想㈢」13ページ）。
64）『大系』「西域物語　下」148ページ。
65）『大系』「西域物語　下」149ページ。
66）『大系』「西域物語　中」127ページ。

らない[67]。鎖国のままでは飢饉で国民を損耗する。改革すべきだが、鎖国体制はいかんともし難い。天明の飢饉の200万人（この数字は本多の誇張だとされている[68]）の餓死者を以て端緒となし、将来の飢饉を救うため、開業を企てる時期だという[69]。

では、このように必要とされる開業とはそもそも何なのか。

「属島之開業といふは、日本附之島々を開きて良国となすべきをいふ」[70]。国を開くというのは、「庸戸（凡庸な輩）」が考えるように、領主の入用を開くのではなく、日本全体を豊かにすることである。「抑開業といふは、船を遣て其島々北極出地を測量し、土地之幅員を測量し、自然土産を料り、土人之員数を料り、其開業なりて、大概何ほどの国となるべきかを知て後、開業に掛るを順とせり」[71]という。

このように、本多はほとんど未開発の荒蕪地を新たに開拓することを開業と考えている。そこに原始的な原住民がいるかもしれない。そこで土地と原住民の調査をまずすべきだと言っている。人間居住の可否は、草木が繁茂しているかどうかで見極められるとする[72]。

原住民に対しては、「若其島之土人いまだ穴居ならば、家宅の道を教示し、或は長たる分は造作しても遣し、万事万端、土人之欲る所に随て、救ひ施すに於ては、懐き随ふ事、童児の父母を慕ふが如く信服すべし、夷狄といへども天下之人情一致なるゆへなり」[73]。つまり原始的生活をしている場合は、文明的な生活を提供する、とにかく万事において原住民の望むように援助する。そうすれば懐いて従うが、それは夷狄といえども人情は同じだからだ。

「欧羅巴諸国の治道を探索するに、武を用て治る事をせず、只徳を用て治るのみ也。威権を以て治むれば、心底より従ふに非ず」[74]という。実際のヨーロッパの植民地支配は違っていたが、少なくとも本多はそう考え、植民地統治の模範としていたと思われる[75]。

属島の開業は日本の勢力拡大の方策でもあり、それは西洋を模範としたものである。ヨーロッパの国々は、本国は小国でも属国を多く獲得して大国となっている[76]。

そのようにして現在ヨーロッパ列強はいずれも属国を多くもって、大豊穣で剛国だ。ゆえに万民みな石屋作りの住まいだ。自国の力だけを以てしては、大業は決してできない[77]。だから開業が必要だという。

属島の開業は、また北方問題と密接に関係している。ロシアが東蝦夷を「検査し」「大造なる日本の属島をモスコヒヤに奪取られた」のに、日本ではそれを夢にも知らず、日本ではただたばこばかりをのみ、昼寝して月日を暮らしていた[78]。それにはあきれ果てたといっている。ロシアに日本の領土が奪われてしまっているという危機感が根底にある。

67）『大系』「西域物語　中」127ページ。
68）『大系』27ページの注。
69）『大系』「西域物語　中」128ページ。
70）『大系』「経世秘策　補遺」44ページ。
71）『大系』「経世秘策　補遺」44ページ。
72）『大系』「経世秘策　後編」65ページ。
73）『大系』「経世秘策　補遺」44ページ。
74）『大系』「西域物語　上」98ページ。
75）1772年にカムチャッカ長官のベームは、南クリール諸島の武力制圧と要塞構築を上申している（秋月俊幸、76ページ）。
76）『大系』「西域物語　中」132ページ。
77）『大系』「西域物語　上」93ページ
78）『大系』「西域物語　上」111ページ。

そこで本多の提案は、カムチャッカ開発である。

「日本国の国号をカムサスカの土地に移し、古日本と国号を改革し、仮館をすへ、貴賤の内より大器英才ありて、徳と能と兼備の人物を選挙し郡県に任じ、彼地に住居を構へ、開業に丹誠をなさしむるにおゐては、年を経て良国と成、追々繁栄を添、終に世界第一の大良国とならん次第の事」[79]という。そうすれば日本はオランダよりはるかに大良国となると主張する。しかるに「カムサスカ大良国にして、東洋諸島の主国なかるべき真理を含めることを説とも、会得する人鮮からん」と嘆く[80]。

人々が本多の言うことに納得しなかったのは、「日本の人は松前の奥は寒国にて、五穀も生ぜず、住居も出来ざる所」と思っているからである。これはもっともと言えよう。しかし本多は、カムチャッカは51度から70余度の大国で、イギリスは赤道以北50余度より60余度にすぎず。「カムサスカ」と「エゲレス」は気候が相等しいという[81]。

「カムサスカの土地に本都を遷し（赤道以北五十一度。エゲレスの都ロントンと同じ、故に気候も相等し）、西唐太島に大城郭を建立し（赤道以北四十六、七度。フランスの都ハリスと同じ、故に気候も相同じ）、山丹、満州と交易して有無を通じ」金銀銅ではなく、品物同士のやりとりをすれば、大きな利益となるという[82]。

また松前は赤道以北40度で、支那の都、順天府（清朝の都北京）と気候が相等しい。故に百穀百菓の出産も相等しいともいう[83]。

ここで興味深いのは本多は、緯度で気候が決まるだけでなく、知的能力や国民性も決まると思っていることである。カムチャッカとイギリスと緯度がほぼ等しいから「寒暑も相等し、国産も相等し、人智も相等しければ、則エゲレス同様の大良国に有べき」という[84]。あるいは、日本と支那は、「北極高度相等しき故、土人の風情も自然に相等し、故に書籍の趣意も人々の胸中と相応せり」という[85]。これはモンテスキューの風土決定論にも似た議論である。

カムチャッカは周廻およそ一千里弱、開業成就の上は現在の日本の国産ほどはできるだろうとする。それが日本に入れば、ただ今の時勢を倍増する。これは国家に豊穣をそえる大いなる助けで、捨てておくべきではない。捨てておけば異国に帰し、捨ておかなければ、日本に帰す。「開業独成就して国家を保持する本意に」かない、「日本と異国境界も自然と立て、国家鎮護の天職に」かなう[86]。

カムチャッカに大都会ができれば、その勢いに乗じて、カムチャッカより南洋の諸島も「独開」して、「アメリカ属の島々迄も独属し従」うだろう[87]。アメリカ土人は、「毛髪黒し、瞳黒く中背にして、我国の人物と異なる事なし」、カムチャッカから地続き「タライン岬より東方へ渡海凡百二十里計にして北アメリカの土地なれば往古より蝦夷の土人漸々移植せしかも知れず」、とすれば我が国と同種類だから、我が国の属国となるべき土地だという[88]。こ

79）『大系』「西域物語　下」160ページ。
80）『大系』「経世秘策　後編」65ページ。
81）『大系』「西域物語　中」132ページ。
82）『大系』「西域物語　中」133－134ページ。
83）『大系』「西域物語　中」132ページ。
84）『大系』「西域物語　中」141ページ。
85）『大系』「西域物語　上」91ページ。
86）『大系』「西域物語　中」132ページ。
87）『大系』「西域物語　中」134－135ページ。

れが実現するかどうかは別にして、拙論でも指摘したが[89]、アリューシャン列島を通ってシベリアから人間がアメリカ大陸に移動したというのは、現在の通説と同じであり、本多利明のひらめきが感じられる瞬間である。

カムチャッカのイギリスに勝っている点は、東方はアメリカにいたり、島々いまだ人道未開の土地が多いことである[90]。このように地政学的条件が有利だと見ているのである。さらに西唐太島は「大国なれば、日本より良国とならん」[91]と範囲を広げている。

ところが日本は、周辺の島々をうち捨てておいたから、安永の頃より「モスコビヤの吏渡来して、この有様を見透かし、土人いまだ人道を得ずして困苦するを救助して、モスコビヤの属国となさんの密策を以て、本国より器財百物を齎（もたら）し来り、土人を撫育し、国産を取て交易し、人の道を教示するに因て、土人も悉く信服してモスコビヤに従い属る者、カムサスカより南洋の東蝦夷凡二十余島に及べり」という事態を招いている[92]。

これが、前にも触れたが、利明の理想としていた開業だと思われる。要点は、本国から器財百物をもってきた、つまり文明の利器の利便さを原住民に教えるところから始めることである。そして現地の産物を交易で手に入れる。こうして人の道、つまり文明を教えることによって、原住民は自然に信服して従うようになる。ロシアは最初から属国にする狙いでこういう作戦を仕掛けた、というのである。

ところが日本は、ペニョフスキーの警告にも拘わらず、いつの間にか「其沙汰（さた）も消失（きえうせ）たり」[93]。もしペニョフスキーの警告に従っていれば、カムチャッカの南20余島も日本領となったはずであるが、今はロシアの領土に組み込まれてしまった。「他国を侵しても本国を増殖せんこと国の務にて、我国の属島を無残に他国に奪取らるゝと云は、論も評も絶果（たえはて）、大息して止（やまん）」[94]と嘆くのである。

カムチャッカへの執着は不思議な感じがするが、オランダの建国を以下のようなものだと誤解していたので、カムチャッカがオランダと重なって見えたのは間違いない。

本多の説明によると、オランダのウィリアム１世が、神聖ローマ皇帝カール５世に、寒冷のため廃地であったアムステルダムの地を拝領して開業したいと願い出たところ、カール５世は、大いに喜んで、あの土地は寒冷で流刑の罪人さえも大いに恐れた土地だ、しかるに租税を上納してそこの領主となることを乞うとは、見上げた大人物だと言ったという。ウィリアム１世は大いに喜んで再拝して退出した。それからウィリアム１世は本国の神聖ローマ帝国を出立して北方の寒地に向かい、かの廃地に到着して、アムステル河の河口に仮の館を設けた後、開業を企てた。その土地は幸いにも北側の片側はみな海沿いである。渡海・運送・交易を以て土民を撫育したところ、大いになつき従った。大河を浚渫し、大城郭をもうけ、そうしてその土地を開発し、今やヨーロッパの三大都市の一つとなったという[95]。

88）「経済放言」『本多利明集』105ページ。
89）森岡邦泰、43ページ。
90）『大系』「西域物語　中」142ページ。
91）『大系』「西域物語　中」134ページ。
92）『大系』「西域物語　中」132－133ページ。
93）『大系』「西域物語　中」133ページ。
94）『大系』「西域物語　中」133ページ。
95）『大系』「西域物語　中」156ページ。

このようにオランダも寒冷な土地に移住してできた国で、今や首都はヨーロッパの三大都市の一つである。カムチャッカも同様に開発できるのに違いないというのである。だからオランダの開祖が国業を興した意を用いてカムチャッカを開発すべきだというのである。カムチャッカとオランダは緯度も等しく、土人の風情、すなわち原住民の性状も同じであろう。それどころかカムチャッカ開発は、オランダを興すよりも、速やかに成就するだろう[96]。なぜならオランダは北方を向いているが、カムチャッカは南方を向いている、オランダは北海を隔てて、向かい側に他国があり、東にはロシアの大国がある。またドイツ、フランスといった強国がある。それに対してカムチャッカは、北方は「夜国氷海」で、人倫絶えた土地で自然の要害である。東方にはおびただしい島々（アリューシャン列島）があり、東は北アメリカに至る。西方には沿海州、満州等々がある。南方は正面で、「東蝦夷の内の二十二島、松前島、日本国、琉球国、其外周廻の小島共、皆是古日本カムサスカに属し従ふべき自然具足の島々共也」[97]という。この古日本カムサスカという表現は興味深いが、本多は、これらの東蝦夷から日本列島、琉球に至る島々をひとつながりのものと見て、それ全体を古日本カムサスカと呼んだのであろう。そしてその島々が外部と接する境界を日本の自然な境界を考え、それらの島々を日本固有の領土と考えていたと思われる。

カムチャッカを日本が支配下に収めたら、既にカムチャッカを実効支配しているロシアはどう出るか。

本多によると、ロシアの官吏が多く渡来して住んでいるが「元来日本の属国の蝦夷土地なれば、彼も強て、彼是いふ事も成まじ、よしや、云とも前の道理あれば、異儀あるまじ」[98]と、非常に楽観的なのである。これは西洋の植民地化が、先に見たように、武力による侵略によるのではなく、原始的原住民に文明の恩恵を施して、父母に子供がなつくように、なつくようにするという手段を取っていると見ていることと関係あるだろう。もっともそういう甘い議論だけではなく、続けて、ロシアは五千余里という遠国であって、今は大徳といわれた「エカテリーナ」という女帝も逝去したと聞いているので、今こそ蝦夷諸島及びカムチャッカの土地を取り戻す時節だ、と現実の政治力学に則ったことも言っている[99]。

本多は西洋と支那とを何度か比較して、当時の知識人としては興味深いことを言っている。本多利明が『西域物語』の結論として主張したのは、「西洋人の大業を興せし手段を見るに、我骨肉を削て渠に与んとするの策なれば、衆是を助けてならしむ」というように西洋は「開業」を行う。つまり原住民に富も文明の利器も与えて、原始的原住民を助けようとし、そうすることによって自己の勢力下に置くことに成功している。その結果「南西の三夷狄（カムチャッカから見て、東の北アメリカ、南の千島、西の沿海州）、みな教示・制度の甘味に蟻の集る如くならん事」となっている[100]。蟻が甘味に集まるように、自然に原住民のほうから服従、同化してくる[101]。文明化作用の力を本多がよく理解している証左である。

96）『大系』「西域物語　下」161ページ。
97）『大系』「西域物語　下」162ページ。
98）『大系』「西域物語　下」165ページ。
99）『大系』「西域物語　下」161ページ。
100）『大系』「西域物語　中」142－143ページ。
101）本多は、ロシア人とアイヌの争い（死者も発生）が起こったことも知っていたが（宮田「本多利明の北方開発経済思想――寛政三年成立『赤夷動静』を中心として」6ページ）、それでも全体としてはこう見ているのである。

エカテリーナの大徳のゆえに、焔硝も英物も国家のために用いられ[102]、現在「天下の大世界、大半モスコビヤに属したるは、只女帝エーカテリナ治世を以最多」いが[103]、干戈を用いて征服した土地は少なく、「徳を博布して服し随ふ国のみ多し」[104]という。文明の恩恵を与えるという徳による征服なのである。

西洋は文明化作用によって属国を増やしたが、それに対して支那はどうか。「支那人の大業を興したるを見るに、最初より渠が骨肉を削てとらんとする故、渠も又酬るに是を以てするゆへ、存亡の境に係る也」という。つまり最初から収奪を行い、そうすると原住民のほうも同様な手段で対抗するから、互いに生存をかけた闘争に突入することになる。「是戦争の因て起る所以なり」[105]。一方が収奪に訴えれば、他方も同じ手段で対抗するのが人間の本性であり、それが戦争の原因となると言っているのだ。これは、一方の自然権の主張が、他方の人間の同様な自然権の主張を惹起し、戦争状態に陥らざるを得ないといったホッブズの議論と同型である。権利の要求にしろ、富を収奪することにしろ、一方の要求は、必ず他方の同様な要求を惹起し、闘争に陥らざるを得ないという人間本性をついている。

このように本多の見解は示唆に富むが、西洋と支那との比較については、上記に記しただけにとどまらず、当時の知識人としては、非常に珍しい見方である。

本多によれば、ヨーロッパ諸国は強大で、豊饒であり、国が強いゆえに外国に侵略されることなく、逆に「万国の内、犯し掠むること其数知らず」、スペインは南北アメリカの最良な国を多く取得したし、「東洋の諸島」もみなヨーロッパ諸国の属国となっている[106]。ヨーロッパが強大な理由は、（文明をエジプトから数えれば）文明が開けて５、６千年もたち、諸々の文物・制度の善美を尽くし、治道の根本を究明し、しかも算数に詳しいゆえ、天文・暦法・測量に詳しく、航海術に長けているからだ[107]。

それに対して支那、日本は大いに遅く、支那は堯の時代より3800余年、日本は神武帝より1500余年。エジプトに比べれば半分にも届かない。物事が行き届かないはずだという。特に日本は新国だからまだ良智が開いていない国だ[108]。つまり歴史の古さが、文明化の進歩を決める要因と考えているようである。

それに加えて「日本の風俗人情」は、「支那の教訓」に染まっているので、「支那の聖賢の教訓に洩たる四大急務」などは夢にも知らない。加えて支那は、「地続の山国」で、船舶輸送が不便な国である。物資の輸送を「人力牛馬」をもってしては、大都会の維持が困難である[109]。よって周囲を海に囲まれた日本と比べると「悪国」であって、国務に欠陥もあり、手本とするには足らない[110]。

しかるに日本は海国なので、「渡海・運送・交易」は「国君の天職最大一の国務」である。従って、「万国へ船舶を遣りて、国用の要用たる産物、及び金銀銅を抜き取て日本へ入

102）『大系』「経世秘策　後編」71ページ。
103）『大系』「経世秘策　後編」71ページ。
104）『大系』「経世秘策　後編」71ページ。
105）『大系』「西域物語　下」162ページ。
106）『大系』「経世秘策　巻下」30ページ。
107）『大系』「経世秘策　巻下」31ページ。
108）『大系』「西域物語　上」95ページ。
109）『大系』「経世秘策　巻下」31ページ。
110）『大系』「経世秘策　巻下」30－31ページ。

れ、国力を厚くすべき」は海国に必然的につきまとっている政策である[111]。交易をせずに自国の力だけでまかなっていては、国力は次第に弱まり、農民にしわ寄せがいって農民が衰え減少するのは自然な勢いであるからだ[112]。

漢籍の素養を身上とする当時の知識人への批判は、随所に現れる。本多は、官船交易を主張したが、当時の通念では武家が売買に携われないとはなんたることだ、と批判している。それは支那の山国の本ばかり読んでいるからで、海国に大きな利点があることを知らないのだ、という[113]。

しかるに日本では西洋を畜生国と見なし、「国初」より、「支那の書籍に外書籍なし，是を熟読して其意味を会得」することにより知見を得た「国風」であった。そして漢籍を読み詩文を作ることを手柄にして衆人を見下し、衆人に忌み嫌われている人が10人中８、９人はいる。そして西洋を「聖人の道」の行われていないところだと見なしている[114]。日本の大儒の名を得た人でも，一国のことにも、ろくに通じる人はないのである[115]。四書五経のような漢学の素養は、現実には役に立たないと見ているのであろう。

ある候と酒席をともにしたとき候は、オランダは夷狄（いてき）だから聖人の道を知ることはできない、人に似て人ではない、卑しく言えば獣類に疑いない、それなのに細工物においては精微でその巧みさは奇妙なことだ、と言ったことがあるが、この人も支那の学問に深く入って、その風俗に染まった人だと内心思ったと述べている[116]。

しかし思うに、学問の道はこのようなものではあるまいという。学問の本来の趣旨は、衆人に背かず、頑愚をも受け入れ、国家に益ある道を追求する以外にはない、という[117]。これは、儒学的伝統からすれば、著しく異なった考えである。儒学では、学問をするとは、人間修養をすることを含み、道徳的に自らを高めることを目指した。自らを修め、家を修め、従って国家が修まるのである。儒学者ではなかった町人学者の石田梅岩でも、同様である。本多にとって、当時の漢学知識人の通念とは違い、学問とはまず新たな知見の獲得、世界の真理の獲得であり、それによって実用的な利益を、ひいては国益を得ることであったと思われる。

だから、それへ入る近道は、「究理学」[118]である。究理学とは、利明によれば、「天地の学」である。そして天地の学に入るには、最初は「数理、推歩、調査の法」から入るより近道はないという[119]。

西洋は本多にとって、６千年の歴史があるので、善悪をよくわきまえ、無心に自業をつとめまもり、君主や目上の者に和睦して、他を奪う貪念（どんねん）なし、という理想の国であった[120]。それは、自然科学の高度な発達（天文、航海技術）から推測されたものであろう。だから儒

111）『大系』「経世秘策　巻下」32ページ。
112）『大系』「経世秘策　巻下」32ページ。
113）『大系』「西域物語　下」152ページ。
114）『大系』「西域物語　上」89ページ。
115）『大系』「西域物語　上」117ページ。
116）『大系』「西域物語　上」92ページ。
117）『大系』「西域物語　上」90ページ。
118）当時蘭学者の間では物理学。利明にとっては、天文・地理を中心とする自然科学。
119）『大系』「西域物語　上」90ページ。
120）『大系』「西域物語　上」108ページ。

学者たちと違って、本多にとって支那は崇敬すべき対象ではない。それは西洋に比べれば文明の進歩に後れた後進国であり（特に自然科学において）、日本の知識人はその悪しき影響に染まっているので、克服すべき対象なのである。

本多の開業論は、これまで見たように民を植えるという文字通りの意味での植民思想が希薄である。内地人の自由移民の可能性も示唆しているが[121]、罪人・浮浪者を開拓民として送り出すこと、すなわち囚人強制移民も述べていることからして、それほど期待していなかったであろう[122]。つまり植民というよりは、開業だったわけである。『西域物語』『経済秘策』などの主著においては、文明化作用による開拓は述べても、移民は述べられていない。「植民」という言葉を造語した志築が「人ヲ植ルコト彼等ガ國ノ習也」と注釈をつけていたように、「人ヲ植ルコト」は、彼等ガ國の習俗であって、日本の習俗でなかったからである。鎖国下では当然ともいえよう。鎖国を否定し、日本の進出を主張した本多利明においても、同様だったのである。

なお本研究は、研究課題「近世日本の経済思想の諸相と西洋思想との接点」、JSPS 科研費24530221の助成を受けたものである。

参考文献

一次資料

川越重昌「本多利明の『焔硝基源論』」『蘭学資料研究会研究報告』（254）、1972年。

宋応星『天工開物』藪内清訳注、平凡社、1969年。

塚谷晃弘・蔵並省自『本多利明　海保青陵』日本思想大系44、岩波書店、1977年。

ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝（上）』加来彰俊訳、岩波文庫、1984年。

本庄栄二郎編『本多利明集』誠文堂、1935年。

本多利明『山塩硝』寛政５年（1798）、京都大学付属図書館。

本多利明『硝石製造大略』寛政５年（1798）、京都大学付属図書館。

二次資料

阿部真琴「本多利明の伝記的研究㈠～㈥」『ヒストリア』⑾～⑬、⑮～⑰、1955～1957年。

秋月俊幸『千島列島をめぐる日本とロシア』北海道大学出版会、2014年。

板垣英治「硝石の舎密学と技術史」『金沢大学文化財学研究』（8）、2006年。

小田信士「本多利明の重商主義思想㈠～㈢」『青山学院経済評論』㉖～㉘、1937～1938年。

菊池勇夫「海防と北方問題」（『岩波講座　日本通史』第14巻、近世４、岩波書店、1995年所収）。

クライナー、ヨゼフ『ケンペルのみた日本』NHK ブックス、1996年。

国立民俗学博物館『ドイツ人の見た元禄時代　ケンペル展』国立民族学博物館、1991年。

121）「蝦夷土地開発愚存之大概」『本多利明集』48ページ。

122）小田信士氏は、第一に植民先が母国より生活が安易たるべきこと、第二に植民する人は、母国にて社会的地位が高くないこと、という条件が満たされないから囚人移民を考えたと考察している（小田信士「本多利明の重商主義思想㈢」10ページ）。

黒田謙一『日本植民思想史』弘文堂書房、1942年。
五之治昌比呂「ラテン語で読むケンペル「鎖国論」：『廻国奇観』収所論文とその翻訳について」『西洋古典論集』22、2010年。
小堀桂一郎『鎖国の思想　ケンペルの世界史的使命』中公新書、1974年。
竹市明弘・常俊宗三郎編『哲学とはなにか』勁草書房、1988年。
塚谷晃弘「江戸後期における経世家の二つの型」（塚谷晃弘・蔵並省自『海保青陵　本多利明』日本思想大系44、岩波書店、1970年所収）。
朝永振一郎『量子力学』みすず書房、1952年。
日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』小学館、2000－2002年。
宮田純「本多利明の経世理念『自然治道』に関する一考察」『中央史学』㉒、1999年。
宮田純「本多利明の国家再生論に関する一考察：カムサスカ開発論を中心に」『中央史学』㉕、2002年。
宮田純「本多利明の経済思想：享和元年成立『交易論』を中心として」『中央史学』㉗、2004年。
宮田純「本多利明の北方開発経済思想――寛政三年成立『赤夷動静』を中心として」『日本経済思想史研究』⑷、2004年。
宮田純「本多利明の水利政策論：寛政一二年成立『河道』を中心として」『中央史学』㉘、2005年。
宮田純「本多利明の経済思想――寛政７年成立『自然治道之弁』の総合的研究」『アジア・日本研究センター紀要』⑸、2009年。
宮田純「本多利明の経済思想――享和元年成立『長器論』を中心として」『日本経済思想史研究』⑼、2009年。
宮田純「本多利明の経済思想・寛政７年成立「自然治道之弁」の総合的研究」『国士舘大学アジア・日本研究センター』⑸、2010年。
宮田純「本多利明の対外交易論――1798年成立『経世秘策』を中心として――」『Asian Japan Journal』⑺、2011年。
宮田純「本多利明の対外交易論：『西域物語』を中心として」『経済学論纂』52⑶、2012年。
宮田純「徳川時代の北方開発政策論：本多利明著『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』を中心として」『中央大学経済研究所年報』㊹、2013年。
森岡邦泰「もう一つの『人口論』」――マルサスと本多利明――」『マルサス学会年報』⑯、2007年。
矢内原忠雄『新渡戸博士　植民地政策講義及論文集』岩波書店、1943年。
柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書、1982年。
柚木學『近世海運史の研究』法政大学出版局、1979年。